は冬春のみなり、○中略誰袖の海寶永元年印本に、六郷の渡り、爰も三月より九月頃までは、土橋かゝるとあるは、九月頃より三月までといふを書誤りしなり、筑波紀行櫻の實享保五年

五株　撰者　貞佐

蜀黍や思ひのたけを葉にさかれ

六郷とれてかさゝぎの橋

六郷の橋はとれて、鵲の橋ばかゝれりといひしなり、前にも記す如く、酒勾も此所も、秋は橋のなければなり、されば享保の頃までも、冬春は土橋のかゝりし歟、又元祿十四年不角が紀行、笠の蠅六郷の條、此橋先年○元年元祿大水に落て、今は長柄の橋の影ぼしとなりぬ、此渡りの船賃、武家の外は二文とあり、土橋の掛りしは、當時元祿の末といふなれど、標題にも知らるゝ如く、五月の紀行なれば、土橋のなきなるべし、

〔江戸名所圖會四〕六郷渡、○略中昔は橋を架せしが、享保年間田中丘隅といへる人の工夫により、洪水の災を除ん爲に橋を止めて、船渡にせしとなり、

〔遊囊賸記四〕六郷渡ハ橋ノ權輿詳ナラズ、永祿ニ其名見ユレバ、北條家ノ盛時ニ掛初ケルニヤ、海道四大橋ノ一ト聞エシモ、貞享ニ流亡シテヨリ永ク此渡トナリ、今ハ橋柱サヘ朽果ヌ、濱名長柄ト同日ノ譚ナルベシ、○略中

六郷渡ハ多摩川ノ下流、荏原、橘樹兩郡ノ境ナリ、川ノ北方ニ六郷村アリ、ヨツテ川ノ名トス、橋ノ長サ元祿前後ノ書ヲ歴檢スルニ、玉露叢ヲハジメトシテ、多クハ百九間ニ作ル、其或ハ百八間百廿間ニツクルハ、傳聞ノ誤ナルベシ、

日本橋

〔皇都午睡三編上〕江戸で日本橋と走り、大坂にて日本橋と叮嚀にいふ、

〔國花萬葉記七下武藏〕日本橋　南北にかゝれり、○略中海道の宿次を去るすには、日本橋を始る、

〔江戸砂子一〕日本橋　南北にかゝる　長凡二十八間